

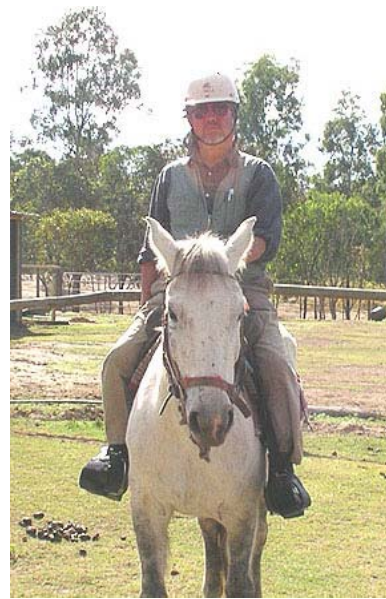
NEWSLETTER
of
The Japanese Society for Applied Animal Behaviour
No.20, April 2010

◇ 《寄稿》平成 22 年度に寄せて

応用動物行動学会 会長 近藤誠司
(北海道大学北方生物圏フィールド科学センター 教授)

恒例の 3 月末の応用動物行動学会・日本家畜管理学会の春季合同発表会も無事終わり、皆様新年度を迎えてお忙しいことと思います。今年の学会では 2 会場合わせて 45 課題の発表があり、昨年よりやや少なめながらもなかなかの盛況で両会場とも活発な議論が飛び交っているようにみうけられました。当日午後からは、名古屋大学大学院生命農学研究科教授の海老原史樹文会員による「マウスの“行動的絶望”を制御する量的形質遺伝子の特定」という表題のシンポジウムがありました。前日都内某所で開催された懇親会でも、「行動的絶望ってなんだ?」「絶望行動を引き起こすためにはかなりきつい実験やらなきやならないんじゃないかな・・・」とか、この話題で大いに盛り上がりました。話題提供者の海老原先生は会員の「ああでもない、こうでもない」をニコニコしながら聴くばかり。当日の講演は非常に興味深く、またサイエンティフィックな興奮を呼び起こすもので、質問・論議の時間が足りなかったことが悔やまれます。海老原先生には今後も会員として我が国の応用動物行動学発展にご活躍いただくことでしょう。

学術大会当日の総会は順調に 30 分程度で無事終了し、会員の皆様のご協力に感謝いたします。この総会で決定を見た重要な事項に、会則の変更があります。実は平成 20 年度で、役員および評議員の任期が終了することになっておりました。しかし、この任期 2 年で今後も繰り返していくと、常時共に行動している日本家畜管理学会の役員・評議員任期と 1 年ずつずれていきます。これはいろいろな点で好ましくないだろうと、応用動物行動学会の役員および評議員の任期を短縮できるような会則に変更し、平成 22 年度～23 年度の役員および評議員任期を 1 年に短縮することと致しました。これで応用動物行動学会と日本家畜管理学会の役員および評議員の任期が同期化することになります。続く審議で、この 1 年については平成 21 年度までの役員および評議員がそのまま選出され変更はないことにな



典型的なオーストラリアン・ホースに載りたいと思ったらこの馬が当たった近藤。馬の名前は、なんとドンキー!!

りました。私もあと1年、会長を務めなければなりません。

他に報告事項として、Animal Behaviour and Managementの編集委員会から、2010年2月末の段階で審査終了論文が3編、審査中が7編という報告があり、今年度の私共の雑誌も充実した内容で公表されていくことでしょう。また頭を丸めて心を入れ替えた友永幹事から、日本動物行動学会・日本動物心理学会・応用動物行動学会・日本家畜管理学会の4学会合同大会を2011年9月に開催すべく、合同幹事会が今年1月に開かれた旨、報告がありました。再来年のことながら、これも楽しみな大会です。今年度については久しぶりに農業施設学会と日本家畜管理学会および応用動物行動学会の共催で、北海道で秋季シンポジウムを開催するという案も決議されました。アニマルウエルフェアに関して話題提供や現地見学が行われるようです。

報告事項では応用動物行動学会の新入会員が平成21年度に41名もあり、会員数は194名となったという喜ばしい報告もありました。日本畜産学会始め沢山の大きな学会が会員数の減少を危惧しているところに、まことにご同慶の至りです。

昨年の年度初めの挨拶で触れました研究発表会開催を1会場で行うという案も審議され、今後に向けて更に検討することになったと理解しております。1会場での開催となりますと、どうしても会期は2日間となりましょう。会場設営や時期など難しい問題が多々あるところではありますが、皆様のお知恵を拝借して是非ご検討いただきたい事柄です。

この研究発表会では昨年に引き続き、優秀発表賞が選考されました。大会終了後、選考委員の投票を集計した結果、第1位 2-20 小宮山園実(北里大獣医)、第2位 2-1 鈴木崇司(酪農大酪農)、第2位 1-19 堂山宗一郎(麻布大獣医)となり、この3名の方が優秀発表賞受賞者となりました。おめでとうございます。特に最も得票の多かった小宮山会員は来年度に日本畜産学会大会が開催される北里大学の所属です。この受賞を弾み車として、十和田での学会ご成功をお祈りいたします。

以上

◇《報告》平成22年度応用動物行動学会総会報告

応用動物行動学会 副会長(事務局長)
森田茂(酪農学園大学)



2010年度の評議員会および総会が、開催されました。重要な案件としては、会則の変更がありました。これは、役員・評議員任期を短縮できるという項目の追加であり、早速、2010年度役員・評議員に適用されました。これはつまり、現体制の実質的1年延長です。最初2年でもお願いしておいて、さらに1年実質延長する、だまし討ち。との影の声もあります。これにより、2011年度からは家畜管理学会と役員改選時期が一致することになります。両学会の幹事を引き受ける者が共通する場合も多く、改選時期の一致は、一昨年からの悲願でもありました。

総会記事は、例年、機関紙2号に掲載していました。応用動物行動学会会員へは、ニュースレターが定期的に刊行されています。2号以降の機関紙は配布しておりません。修正版

の評議員会および総会資料は、先日(2010年4月2日)配信のものとし、下記の議事録を、ニュースレター記事とします。

2010年度応用動物行動学会評議員会 議事録

開催日時：2010年3月29日(月) 11:45-12:15

開催場所：明治大学 駿河台キャンパス リバティータワー10階 1105教室

出席人数：25名

記録：松浦晶央(北里大学)、記録確認：森田 茂(酪農学園大学)

報告事項

1. 2008年活動報告

- 1) メール会議から7) HP およびメーリングリストまで森田副会長から報告があった。
- 8) 日本動物行動学会、日本動物心理学会との合同大会(4学会合同大会と資料を訂正)友永幹事より報告があった。2011年9月に慶応大学にて開催を予定している。今後、メーリングリストやニュースレターなどで進捗状況を掲載することとした。

2. 会員状況：総会資料の通り

3. 会計報告：出口会計担当幹事より報告があった。

4. 会計監査報告：杉田監事より適正に管理されていると監査報告があった。

以上、報告事項はすべて承認された。

審議事項

1. 会則の変更：森田副会長より、日本家畜管理学会と応用動物行動学会の役員改選時期を一致させるねらいで役員の任期を1年にできるように会則変更の提案があった。議案の通り、総会にかけることが承認された(ただし、付記を「平成22年3月30日改正」へ資料を訂正)。

2. 役員・評議委員の交代：議案の通り承認された。

3. 2010年度事業計画

1) 2010年度春季発表会：承認された。

2) 学会誌関連：植竹副会長より説明があった。原著論文・短報と資料との区別を明確にしたうえで、積極的に現場情報を資料として掲載する方向で投稿規定の変更を検討することとした。また、改定案は2011年度の総会に諮ることとした。

3) シンポジウム～5) 4学会合同大会(資料訂正)：承認された。

6) ISAE 2010 発表者・役員参加補助：

近藤会長から説明があった。発表者としての申請が誰からもなかったため、今年度は「なし」として締め切ることとした。また、役員としては、ISAE アジア地区セクレタリーである植竹副会長に補助を行うこととした。



贈呈式で「深々と」頭を下げる近藤会長と
気楽に受け取る植竹 ISAE 東アジア地区担当!
(M 副会長談)

3. 2010 年度予算案：出口会計担当幹事より提案があり、承認された。

4. その他

ISAE 東アジア地区セクレタリーの植竹副会長から、アジア地区から研究者を招いてシンポジウムを開催する、あるいは、ISAE 大会にてランチョンセミナーを開催するなどといった企画を検討中であると説明があった。

2010 年度応用動物行動学会総会 議事録

開催日時：2010 年 3 月 30 日（火）12:25-12:55

開催場所：明治大学 駿河台キャンパス リバティータワー2 階 1021 教室

出席人数：30 名

記録：松浦晶央(北里大学)、記録確認：森田茂(酪農学園大学)

ほぼ評議員会と同じであるため、異なる部分のみ列挙した。

報告事項

4. 監査報告：報告者は、柏村監事であった。

審議事項

1. 会則の変更：森田副会長より、日本家畜管理学会と応用動物行動学会の役員改選時期を一致させるねらいで役員の任期を 1 年にできるように会則変更の提案があった。議案の通り、承認された（付記を「平成 22 年 3 月 30 日改正」へ資料を訂正）。その上で、次期役員および評議員任期を 1 年へ短縮することに決定した。
2. 役員・評議委員の交代：議案の通り、2010 年度役員・評議員が承認された。所属変更などは、申し出により、適宜対応する。
3. 事業計画の 3)シンポジウムの(2)秋季シンポジウム:「2010 年度もしくは」を削除し、2011 年度に開催を検討中である。

4. その他

植竹副会長より ISAE と応用動物行動学会で企画を検討中であると説明があり、これにひきつづいて、役員補助の贈呈式があった。

2009年度決算(案)			2010.2.28		
項目	収入(円)			支出(円)	
	2009予算	2009決算		2009予算	2009決算
前年度繰越金	397,989	397,989	会誌発行費	320,000	251,287
個人会費	336,000	342,000	シンポジウム・学会費	150,000	115,275
賛助会費	0	0	会議費	12,000	0
雑収入	1,000	242	通信費	1,000	480
			消耗品費	1,000	621
			謝金	1,000	0
			手数料	1,000	0
			予備費	248,989	0
合計	734,989	740,231	合計	734,989	367,663

収支差額 372,568円

個人会費内訳：2007年度6,000円、2008年度26,000円、2009年度266,000円、2010年度44,000円
 雑収入： 利子

会誌発行費：管理学会との合同出版の経費負担分。印刷費の約37%負担。
 シンポジウム・学会費：春季大会会場使用料・講師謝礼、与那国島シンポジウム経費、4学会共催委員会委員旅費
 通信費：郵便切手代金
 消耗品費：領収証、封筒代金

収支差額 372,568円は、2010年度繰越金とする。(総会での承認後)

特別会計 2009予算

国際応用動物行動学会派遣など基金予算 (設立 2006/02/26 当初 3,026,977円)

項目	収入(円)		支出(円)
前年度繰越	1,933,709	研究発表者派遣補助	200,000
利子	1,500	役員派遣補助	200,000
		市民公開シンポ	50,000
		送金料など	1,500
合計	1,935,209	合計	451,500

2009年度末基金残高(計画) 1,483,709

特別会計 2009決算

国際応用動物行動学会派遣など基金決算 (設立 2006/02/26)

本基金はISAE2005開催の余剰金を基に設立され、その管理・運用は、締結書に基づき応用動物行動学会が実施している。

項目	収入(円)		支出(円)
前年度繰越	1,933,709	研究発表者派遣補助	300,000
利子	466	(小針、加瀬、小山)	
		役員派遣補助	100,000
		(ISAE2009 近藤誠司)	
		市民公開シンポ	42,860
合計	1,934,175	合計	442,860

2009年度末基金残高 1,491,315

資産合計 1,491,315
 資産内訳 銀行口座 1,151,639
 郵便貯金 112,460
 現金 227,216

特別会計 2010予算

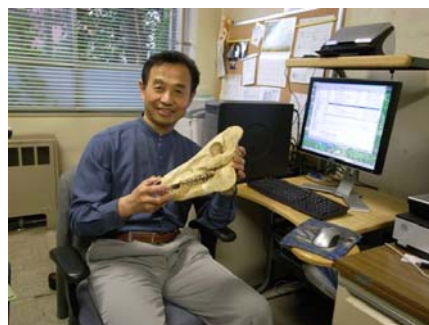
国際応用動物行動学会派遣など基金予算 (設立 2006/02/26 当初 3,026,977円)

項目	収入(円)		支出(円)
前年度繰越	1,491,315	研究発表者派遣補助	200,000
利子	500	役員派遣補助	200,000
		市民公開シンポ	50,000
		送金料	500
合計	1,491,815	合計	450,500

2009年度末基金残高(計画) 1,041,315

◇ 《報告》2010 年度応用動物行動学会・
日本家畜管理学会 春季合同研究発表会報告

副会長・大会委員長 梶 光一
(東京農工大学)



本年度は45題の発表があり、2会場にわたっての発表となった。もともと家畜管理と応用動物行動という間口の広い対象とする動物が伴侶動物、家畜、野生動物と多様であり、畜産関係の話題が過半数を占めるものの、伴侶動物6題、展示動物5題、野生動物6題と多種多様で幅の広い話題提供があった。私の研究分野に近いところでは、シカやイノシシの被害防除や海鳥の混獲防止についての、行動学的なアプローチが興味深かった。動物行動学的な視点からの被害管理はとても新鮮であるが、実際の被害管理の現場との情報交換が不可欠な分野でもあり、今後の発展が望まれる。また、野生動物の行動観察は非常に制約があるため、家畜の採食行動研究などのアプローチは参考になる点も多々あるように思えた。海老原史樹文先生による講演「マウスの“行動的絶望”を制御する量的形質遺伝子の特定」は、遺伝的形質がどこまで行動を制御するかという奥深い内容であり、多くの聴衆の関心を集め、質疑応答もとても活発だった。本学会は遺伝子から象まで扱い、行動という言葉ではひとくくりにくくならず、多様で焦点が定まらないのが特徴なのかも知れない。事前の準備や当日の運営にご尽力いただいた皆さんに感謝いたします。

◇ 《報告》応用動物行動学会春季シンポジウム報告

シンポジウム担当 青山 真人(宇都宮大学)

2010年3月30日、第112回日本畜産学会大会が明治大学駿河台キャンパスで開催された。それに伴い、家畜管理学会との合同で、恒例の春季研究発表会が開催された。そのまさに同日、研究発表会の際に、2010年度春季シンポジウムを開催した。今回講演を依頼したのは、名古屋大学大学院行動統御学研究室の海老原史樹文先生、タイトルは「マウスの”行動的絶望”を制御する量的形質遺伝子の特定」であった。



例によって機関誌 Animal Behaviour and Management に先生自身の報告を掲載させて頂く予定であるので、ここでは内容の詳しい報告はしないで、青山の感想を書かせて頂く。今回のシンポの演題を何にしようか、幹事会メールで意見を伺ったところ、東北大学大学院の佐藤衆介先生から、「2008年秋に、海老原先生が応用動物行動学会に入会して頂いた。先生のお仕事を紹介する意味でも、海老原先生に依頼してはどうか」という提案を頂いた。早速、海老原先生に連絡を取ったところ、快く引き受けて頂いた。海老原先生と言えば、



サーカディアン（概日）リズムの研究で有名である。今回も概日リズムのお話しが聴けるものと考えていたが、先生から頂いた演題を拝見して、少々驚いた。「行動的絶望」（水槽の中で泳がせたり、尾を固定してぶら下げたりすると、しばらくは泳いで、あるいはもがいているが、やがてそれを止めて動かなくなる現象）の研究をされていたからである。私自身、この現象には以前から興味があったので、非常に楽しみにしていた。

先生の講演を聴いて分かったのだが（実は3月28日の日本畜産学会大会の懇親会で、海老原先生ご自身、あるいは先生が指導されている大学院生の今井早希さんに聴いて、シンポジウムの前に既に知ったのだが）、やはり元々は概日リズムの研究のためにリズムに異常を示すミュータントマウス（CSマウス）を飼育しておられたことが始まりのようであった。CSマウスのストレス耐性を、様々な行動テストで検査されたときに、「行動的絶望」を通常のマウスよりも示さないことが分かり、その方面の研究を始められたとのことであった。CSマウスには他に、子育てが下手（仔マウスを傷つける）、侵入者（自分のケージに入って来た他のマウス）に対して臆病であるなどの特徴がある。ちなみに私が最も興味を持ったのは（リズムの話になってしまうのだが）、決まった時間帯にのみ餌を与えられることが、正常マウスには「体内時計」のリセットにはならない、つまり、給餌の時間帯に関係なく自分自身のリズムで生活するのだが、CSマウスには光周期と同じように給餌の時間帯がリセットになり得るといふ現象であった。CSマウスは正常マウスにはない能力を獲得しているのか、あるいは本来ならば食餌に左右されずに自分のリズムを維持する必要があるのに、CSマウスはその能力を失ってしまったのか？

それと私が最も感銘を受けたのは、最新の様々な技術を用いていても、実験の組み立てが、良い意味で非常に単純なことである。CSマウスを数世代に渡って正常マウスに戻し交配することによって、CSマウス由来の遺伝子をどんどん薄めて行き、それでも「行動的絶望」を示さないという形質を維持しているマウスはどれか、どの遺伝子がCSマウス由来なのか。さらにこの方法によってターゲットの遺伝子の候補を絞り込むことが出来たら、次は逆にこの遺伝子のみが正常マウスのミュータントをトランスジェニックによって作り、



このマウスがどのような行動を取るかを観察する。ある形質を決定する遺伝子を特定するために、これほど考え方が単純で、だからこそ結果に自信が持てる方法があるのか。いつか、家畜でこのような実験ができる日が来るのだろうか・・・。

話しは変わるが、今回のシンポジウムには、約 120 名の方々に参加して頂いた。私がシンポジウム担当幹事になってから、最多の参加人数である。もちろん、海老原先生の研究テーマが、多くの人の関心を惹きつけたことが最大の要因である。それに我田引水的に少し加えさせて頂くと、私はこれまで、畜産学会との共催のシンポジウム以外には、少し遠慮して畜産学会報、畜産学会大会要旨集には案内を載せなかったのであるが、今回のシンポジウムは、日本畜産学会の方に案内の掲載をお願いしたのである。どれほどの宣伝効果があったのかは分からないが、これからは図々しく？、畜産学会の大会に伴って行なうシンポジウムは、畜産学会の講演要旨集などにも、案内の掲載を頼もう、と思った。

最後に、「会場係」としてパソコンの設定や写真撮影などをして頂いた松浦先生（北里大）、麻布大学の学生の皆様、撮影用カメラを貸して下さった森田先生（酪農学園大）、感謝致します。また、学生によるシンポジウム報告を、シンポが始まるの数 10 分前に会場でいきなり依頼したにもかかわらず快く引き受けてくれた帝京科学大学の伊藤さん、小野寺さん、ありがとうございました。それから、前日 29 日の日本家畜管理学会・応用動物行動学会合同懇親会で、これまたいきなりの依頼にもかかわらず受付を引き受けて下さった二宮先生（東北大）、今井さん（名古屋大；上述した、海老原先生の研究室の院生）、どうもありがとうございました。

◇ 《報告》2010 年度春季シンポジウム参加報告

伊藤 美樹
(帝京科学大学大学院 修士 1 年)



2010 年 3 月 30 日、第 112 回日本畜産学会大会と合同で 2010 年度春季研究発表会が明治大学駿河台キャンパスで開催されました。私は、「Cat-Stress-Score を用いた猫のストレス評価における評価者間の相違」について発表させていただきました。つたない発表にも関わらずご静聴くださいました会場の皆さん、貴重なご意見を下さった皆様に深く感謝いたします。また、犬猫だけでなく、牛、馬、野生動物にいたるまで大変興味深い研究について拝聴でき、私自身の見解をおおいに広げることが出来ました。

今回のシンポジウムでは名古屋大学大学院 生命農学研究科の海老原史樹文先生のご講演で「マウスの“行動的絶望”を制御する量的形質遺伝子の特定」というタイトルでお話くださいました。マウスの“行動的絶望”については申し訳ないことに詳しく存じ上げなかったのですが、ご講演を聴くまでどんなものなのかとても気になっていました。マウスの絶望行動とは、水槽の中で泳がせたり、尻尾をつまんで持ち上げるなど、どうがんばっても逃げられない状況下で、突然マウスが逃避行動をやめ無動の状態になる、といった行動のこのようです。この行動は人間でのうつ状態に似たものであり、抗うつ薬を投与す

ることで無動状態の時間が短くなるようです。海老原先生のお話は始終、軽快なリズムのようで大変わかりやすく、楽しく聞かせていただきました。

ご講演の中でも、私が最も興味を引かれたのはCSマウスの特徴でした。CSマウスは社交性が低く、子育て時に子供を傷つけてしまう、睡眠障害など、まるで現代人を彷彿とさせるような疾患があるという点です。また、CSマウスはそもそも概日リズムに異常のある個体であることから、崩れた生活リズムで日々を過ごしている人に、やはりこのような精神的なまたは健康上の異常が現れてしまうのだろうか、と思いました。私としても、決して規則正しい生活リズムで生活しているとはいえないのでこの研究が今後どのように発展していくのか非常に気になるところであります。CSマウスがストレスに対する耐性が弱く、常に何らかのストレスにさらされているのだとしたら、まさにあの小さなプラスチックケージの中に現代社会の縮図が垣間見えるのかも知れません。

最後に、ご講演いただきました海老原先生に厚く御礼申し上げます。また、このようにニュースレターの貴重なスペースをお借りし感想を述べさせていただけることに感謝いたします。今回、初めて発表者として学会に参加させていただきましたが、たくさんの方に刺激を受けた1日となりとても勉強になりました。今後の研究に更に意欲的に取り組もうと決意し、私の参加報告とさせていただきます。皆様、ありがとうございました。

◇ 《報告》2010年度春季シンポジウム参加報告

小野寺 温

(帝京科学大学大学院 博士後期課程1年)

今年のシンポジウムは、名古屋大学大学院行動統御学研究室の海老原史樹文先生、タイトルは「マウスの”行動的絶望”を制御する量的形質遺伝子の特定」であった。前日の懇親会の場で、少し海老原先生とお話させて頂く機会があり、この時に本学の学長補佐で動物生理学がご専門の田畑満生教授や神経形態学がご専門の内藤順平教授のこともご存じで、特に田畑先生とはご友人であられることも聞くことができました。また、この時に海老原先生が飼われておられた犬のキャバリアのお話も聞くことができ、そのとても和やかなお話ぶりを通して、本当に穏やかで優しい先生であられるなという印象を受けました。

そして次の日のシンポジウムでは、無動化しないCSマウスと適度な無動時間を示すC57BL/6Jマウスを使って、絶望行動を制御する量的形質遺伝子を特定したことのお話を聞くことができました。私は、Usp46という遺伝子の働きによりマウスが無動にならないことであることも初めて知ることができました。海老原先生は、この遺伝子特定のために行った長年にわたる実験の方法や過程を私たち学生にも分かりやすくご説明してくださいました。シンポジウム後の他の先生方からの質問も含めて聞いていくと、やはり実験の方法や過程というものは基本を大切にしながら、自らの発想力、そしてその中で信頼性と妥当性



を常に考え続ける必要性を改めて感じさせられました。

また、この研究で発見したことをヒトの精神疾患と関連させて考えていくということにも驚きを感じさせられました。確かに、講演の中でCS マウスには他に、仔マウスを傷つけてしまう個体がいることや、自分のスペースに他のマウスが入ってきたことに対して、終始逃げ回り、接触を持たない臆病さがあることなど、実際にCS マウスの行動の映像を見て知ることができました。このことを考えてみると、CS マウスのストレスに対する脆弱さというのはある意味、感受性が豊かで傷つきやすいようなことを連想させられ、ヒトの精神疾患との関連性をみいだすことはとても面白く、私自身興味深いなと思われました。海老原先生のお話を聞いて、研究から発見したことを、何かに生かそうとすることの大切さも感じさせられました。逆に言えば、行った研究からの発見は何に役立つのかを常に考えて計画をたてて、調査をするべきであることを強く感じさせられました。私も不思議に満ち溢れたネコの行動について、一歩ずつ着実に研究を進め、いつかネコと飼い主とのより良い関係のために役に立たせられるような結果を残したいです。

◇《告知》2011年9月は4学会合同大会が開催されます！！



4学会合同大会担当幹事 友永雅己（京都大学霊長類研究所）

はじめまして、4学会合同大会担当幹事の友永です。かねてから懸案であった日本動物心理学会と日本動物行動学会の合同大会が2011年に開催されることになったのですが、この合同大会に応用動物行動学会および日本家畜管理学会も参加することになり、2010年1月23日に第1回実行委員会が慶応大学で開催されました。大会委員長は慶応大学文学部の渡辺茂先生です。開催場所は慶応大学の三田キャンパス、開催時期は2011年の9月後半（後期授業の開始前）を予定しています。今後、実行委員会での議論を重ね、全体の大枠やプログラムの構成などを固めていく予定です。委員会の議事については逐次ニュースレター等で会員の皆様にお伝えしていきたいと思っております。今後ともよろしくお願い申し上げます。

なお、実行委員会の構成は下記のとおりです。

日本動物行動学会

上田恵介（立教大学） 長谷川寿一（東京大学）（他に追加予定）

応用動物行動学会・日本家畜管理学会

近藤誠司（北海道大学） 植竹勝治（麻布大学） 青山真人（宇都宮大学）

友永雅己（京都大学霊長類研究所）

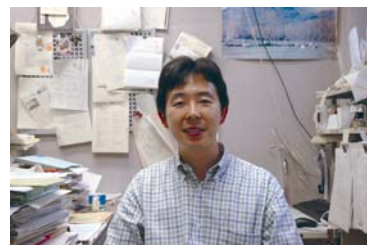
日本動物心理学会

渡辺茂（慶應義塾大学、大会委員長） 山崎由美子（慶應義塾大学、事務局）

伊澤栄一（慶應義塾大学、事務局） 菅理江（埼玉医科大学、事務局）

◇ 《告知》学会のメーリングリストと Web サイト

通信担当 竹田謙一(信州大)



皆さま、こんにちは。通信担当の竹田です。本学会では、会員同士のコミュニケーションツールとして、学会専用のメーリングリストを立ち上げております。学会から皆さまへの情報伝達だけでなく、研究面での悩みや相談等にも使っていただけます。

情報発信の際は、jsaab@shinshu-u.ac.jp のアドレスを入力ください。また、学会の Web サイトもあります。学会誌の目次を掲載しておりますので、ご覧ください。

http://karamatsu.shinshu-u.ac.jp/lab/ethology/jsaab_index.htm

以下に最近予定されている国際学会等の情報を列記しました。皆さまの積極的なご参加を期待しております。

- ・ *The 44th ISAE (International Society of Applied Ethology) Conference, 3-7 August, 2010.*
<http://www.isaesweden2010.se/>
- ・ *UFAW (The Universities Federation for Animal Welfare) Animal Welfare Conference, 30th June 2010.*
<http://www.ufaw.org.uk/animal-welfare-conference.php>
- ・ *The 7th International Conference on Methods and Techniques in Behavioral research Measuring Behavior 2010, 24 - 27 August 2010.*
<http://www.measuringbehavior.org/>
- ・ *The 14th International "Stress and Behavior" Neuroscience and Biopsychiatry Conference, May 16-20, 2010.*
<http://stress-and-behavior.com/conference/index.html>

*全てを網羅しているわけではありません。ご容赦ください。

◇ 編集後記

新年度に変わり、人の入れ代わりや仕事の引継ぎなどで忙しい時期かと思いますが、皆様におかれましてはいかがお過ごしでしょうか。今号では、春の研究発表会、総会、シンポジウム等の報告を中心にお届けしました。早いもので、今回でニュースレターも第 20 号になります。今号より記事内容に合わせて《報告》《告知》《寄稿》などの区分を設けました。これからも見やすい紙面作りを心がけ、沢山の情報を皆様にお届けしたいと思っておりますので、ご協力お願いいたします。ご連絡、配信希望の情報などございましたら、気兼ねなくご連絡ください (NL担当 茨城大 小針大助：kohari@mx.ibaraki.ac.jp)